



ひと

カンボジア和平15年の国際シンポジウムを準備する

熊^{くま}岡^{おか}路^{みち}矢^やさん(59)

援助に入った国・地域は20を超える。その「原点」はカンボジアにある。

全共闘世代。東京外語大で中国語を学び、卒業間近に「技術が必要だ」と中退して自動車整備の道へ。78年、ベトナムがカンボジアに侵攻し、大量の難民がタイへ押し寄せた。突き動かされるように現金35万円を手にバンコクへ飛んだ。

設立直後の日本国際ボランティアセンター(JVC)のボランティアになり、難民キ

ャンプで自動車修理を教えた。両親を亡くし、1カ月歩いて逃れてきた16歳の少年らを見て「この子たちが希望を持てる国づくりに協力したい」と誓った。

内戦中の85年、プノンペンに駐在。地雷の埋まる郊外で井戸掘りを3年間支援した。

91年のパリ和平協定直後のカンボジアは希望にあふれていた。今は治安が安定したが、貧富の差が広がり、政府の強硬な土地収用策などに重苦しさを感じる。「だからこ

そ現地の生の声を聞きたい」事務局長を務める「カンボジア市民フォーラム」が10月20、22日、東京で国際シンポジウムを開く。和平から15年たち、カンボジアの民主化の課題と将来像を議論する。

妻はボランティア仲間の看護師。シンポを「カンボジア体験を次世代へ引き継ぐ場になりたい」と位置づけ、閉幕後、11年務めたJVCの代表理事も後進に譲る。

文 矢野 英基
写真 高波 淳